

『ヘロデの過ちと彼の罪』

’21/01/17

聖書箇所: マルコの福音書 6章 14-29節 (新約 p.75-)

その人が持っている人間性と言うか、その人が、「どういった人間なのか？」ということ、その人が何を優先し、どんな選択をしていくか？ということによって分かってきます。もちろん、この世の中に誰一人、完璧な人間などおりません…。しかし、もしも、私たちが先人の歩みや彼らの過ちから学んでいくことができれば、私たちも、少しは様々な罪や過ちから守られるのではないのでしょうか？

I コリント 10章では、こんな風に教えられています。『8 また、私たちは、彼らのある人たちが姦淫をしたのにならって姦淫をすることはないようにしましょう。彼らは姦淫のゆえに一日に二万三千人死にしました。9 私たちは、さらに、彼らの中のある人たちが主を試みたのにならって主を試みることはないようにしましょう。彼らは蛇に滅ぼされました。10 また、彼らの中のある人たちがつぶやいたのにならってつぶやいてはいけません。彼らは滅ぼす者に滅ぼされました。11 これらのことが彼らに起こしたのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。』(I コリント 10:8-11)

⇒ここでは、旧約の時代、あのイスラエルの民たちが様々な罪に陥ってしまったが故に、その度に、大変な報いを、その身に招いてしまったということが記されています。私たちが、そういったことにならないよう、聖書に記されている、過去の教訓から学んでいかなければいけないのです！

命題: 国主ヘロデが選択した生き方は、どのようなものだったでしょう？

今日、私たちに与えられたみことばは、ヘロデ王様が犯してしまった過ちに関することです。ヘロデ王は、一体、どのような過ちに陥って…、また、どのような罪を犯してしまったのでしょうか？そうして、そこから、私たちが今日、何を学んでいくべきなのでしょう？どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今日のみことばであるマルコ 6:14-29をお開きください。

I・“神のみこころ”を軽んじた！(14-18節)

まずは、今回のみことばの内、14-18節を通して、ヘロデ王が、“神様のみこころ”というものを軽んじてしまった！という部分を、ご一緒に見ていきたいと思います。神様のみこころというものは、決して、私たちが軽んじたり…、粗末に扱ったり…、あるいは、無視してしまっても良いものではありません。まずは、そういったことを、ご一緒に確認していきましょう。

14 イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人々は、「バプテスマのヨハネが死人の中からよみがえったのだ。だから、あんな力が、彼のうちに働いているのだ」と言っていた。

15 別の人々は、「彼はエリヤだ」と言い、さらに別の人々は、「昔の預言者の中のひとりのような預言者だ」と言っていた。

16 しかし、ヘロデはうわさを聞いて、「私が首をはねたあのヨハネが生き返ったのだ」と言っていた。

17 実は、このヘロデが、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤのことで、——ヘロデはこの女を妻としていた——人々をやってヨハネを捕らえ、牢につないだのであった。

18 これは、ヨハネがヘロデに、「あなたが兄弟の妻を自分のものとしていることは不法です」と言い張ったからである。

●ここで言われているヘロデ王とは？

実は、新約聖書の中には、何人かの「ヘロデ王」という人物が出てきます(実は5人)。そこで、皆さん

の中で、このヘロデ王という人物に関して、混乱があるといけませんので、ここで簡単に説明させていただきます。…まず、新約聖書の中で、1番最初に登場してきて、多分1番有名なのは、マタイ 2章に記されている、イエス様がお生まれになった時、東方から来た博士たちが会ったという、あのヘロデ王様です。あのヘロデ王は、歴史的には、「ヘロデ大王」という名前前で知られています。

そうして、今日のみことばに登場している「ヘロデ王」と言いますのは、そのヘロデ大王からすると、息子になりまして、歴史的には、「ヘロデ・アンティパス」と呼ばれています。実は、この「ヘロデ・アンティパス」ですが、彼は、生まれて間もないイエス様のことを殺そうとしたヘロデ大王と、その第4の妻マルタケとの間に生まれた子どもで、ヘロデ大王亡き後、3人の兄弟で、その領地を受け継ぎ、ガリラヤとペレヤ地方を治めておりましたが、厳密には、「国主」という地位であって、「王様」ではありませんでした…。このヘロデ・アンティパスは、もともと妻がおりましたが、自分の異母兄弟であるヘロデ・ピリポの妻ヘロデヤを自分のものとして、かつての妻とは離婚してしまいました。イエス様が十字架に付けられた時、裁判でイエス様のことを裁いたヘロデとは、このヘロデ・アンティパスになります。

●イエス様とバプテスマのヨハネとの関係性？

さて、今日のみことばが教えてくれていることですが…、当時、イエス様の活躍ぶりが、あまりにも知れ渡って、このヘロデ・アンティパスの耳にまで届きます。そのイエス様に関して、当時の者たちは、こんな風に考えていたようです、『バプテスマのヨハネが死人の中からよみがえったのだ。だから、あんな力が、彼のうちに働いているのだ！』って…。皆さんも、よくご存じのように、バプテスマのヨハネは、救い主であるイエス様の先駆者…、つまり、救い主のための道を備えるよう、神が遣わされた特別な人物であって、あのイエス様にバプテスマを施した人物でありました。

これは、その時のみことばを学んだ時にもお話ししましたが、多くの歴史家たちは、イエス様がかつて、このバプテスマのヨハネの弟子であったと考えています。でも、決して、そうではありません。…と言いますのも、マルコ 1章には、そのバプテスマのヨハネが、イエス様について告白した、こんな記録が書き留められています。『7 彼は宣べ伝えて言った。「私よりもさらに力のある方が、あとからおいでになります。私には、かがんでその方のくつのひもを解く値うちもありません。8 私はあなたがたに水でバプテスマを授けましたが、その方は、あなたがたに聖霊のバプテスマをお授けになります。』(マルコ 1:7-8)

⇒皆さん、聞いてくださいました？あのバプテスマのヨハネは、イエス様のことを指して、「私は、イエス様の靴の紐を解く値打ちも無い…」と言ったのです！…実は、この「靴の紐を解く」という仕事は、当時の奴隷たちの中で、最も身分の低い奴隷がする働きであったのです。つまり、バプテスマのヨハネは、自分のことを、「私なんて、イエス様からしたら、最も身分の低い奴隷以下の存在である…、いや、奴隷にさえなれない！」ということをやっているのです！…ですから、イエス様が、バプテスマのヨハネの弟子であったなんていう風な見解は、全くの誤解であって、聖書の正しい理解ではありません。

しかし、片や、イエス様の方は、そのバプテスマのヨハネに関して、こんな風に説明をしておられます…。

マタイ 11章、『10 この人こそ、『見よ、わたしは使いをあなたの前に遣わし、あなたの道を、あなたの前に備えさせよう。』と書かれているその人です。11 まことに、あなたがたに告げます。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした。しかも、天の御国の一番小さい者でも、彼より偉大です。』(マタイ 11:10-11) ⇒ 皆さん、聞いてくださいました？イエス様は、あのバプテスマのヨハネのことを、「彼よりも優れた人物は居ない！」という風なことをおっしゃられたのです。…それほど、バプテスマのヨハネは偉大な人物だったのです。…と言いますのは、その当時、彼ほど、世の中に、大きな影響を与えたような者は居なかったからです。だから、今日のみことばの 14節後半や 15節では、バプテスマのヨハネのことを指して、その偉大さやその影響の大きさについて…、旧約時代の預言者エリヤと比較して触れられてあるわけです。

●彼が優先したもの？

さて、今日のみことばの中心人物であるヘロデ王ですが、このヘロデという人物は、一体、どのような者だったのでしょうか？…先程も言いましたように、彼が取った行動…、彼が優先したのを見ていくことで、そのヘロデという人物の人間性が見えてきます。

どうぞ、今日のみことばの 14 節と 16 節に注目してください。ここでは、『バプテスマのヨハネが死人の中からよみがえったのだ…』とか、『私が首をはねたあのヨハネが生き返った…』なんていう話がされています。実は、この時、バプテスマのヨハネは、もう既に殺されてしまっていたのです。…なので、今日のみことばの 17 節以降では、このヘロデ王が、バプテスマのヨハネを殺すまでの“いきさつ”について説明がなされています。だから、ここ 17 節の冒頭には、『実は…』とあるわけです。

しかし、今日のみことばでは、このヘロデがバプテスマのヨハネを殺すまでの経緯については、ある程度、詳しく説明されていますが、そのきっかけになった、ヘロデ王の間違った結婚については、あまり詳しく触れられていません。…と言いますのは、恐らく、当時、ヘロデの結婚は、それほど有名と言うか…、あまり詳しく説明する必要も無かったほど、皆に周知されていたのだらうと思われまます。

どうぞ、皆さん。先程、簡単に説明したヘロデ王の再婚について思い出してみてください。このヘロデは、その時、もう既に自分の妻がいたにも関わらず、自分の異母兄弟であったヘロデ・ピリポの妻であったヘロデヤという女性を自分の妻にしてしまったのです。…このことを現代風に言いますと、所謂、「不倫」とか、「略奪婚」と言い得るのではないのでしょうか？

もちろん、そういったことは、聖書のみことばがはっきりと禁じていることでもありました。例えば、旧約聖書のレビ記 18:16 には、こう記されています。『あなたの兄弟の妻を犯してはならない。それはあなたの兄弟をはずかしめることである。』って…。また、マラキ書 2:16 にも、こうあります。『わたしは、離婚を憎む』とイスラエルの神、【主】は仰せられる。「わたしは、暴力でその着物をおおう」と万軍の【主】は仰せられる。あなたがたは、あなたがたの霊に注意せよ。裏切ってはならない。』って…。このように、天の神様は、離婚を憎んでおられます。…皆さん。覚えてくださっていますか？例えば、キリスト教式で結婚式を挙げる時、こんな風に誓いの言葉を交わすのを覚えておられますか？「死が二人を分かちまで…」って…。つまり、普通、結婚というのは、どちらかが亡くなるまで…、つまり、死別するまで続くものなのです。このように、みことばが教える結婚というものには、離婚などはあり得ません。だから、バプテスマのヨハネは、そういったことをヘロデに忠告したのです、それは「不法です！主のみこころに背いている！」って…。

しかし、このヘロデは、そういった厳しくも…、聖書的な忠告をしてくれたヨハネに対して、どう反応したのでしょうか？⇒17 節の後半、彼は、『人をやってヨハネを捕らえ、牢につないだ…』わけです。何と！ヘロデは、神が救い主の先駆者として遣わされた…、人類史上、最も偉大な人物とも言い得るような…、そんなバプテスマのヨハネのことを牢へつないだわけです。良いのでしょうか？皆さん？…この時、ヘロデは、ただ単に、ヨハネに逆らっただけではありません！ヘロデは、主のみこころを指摘したヨハネを投獄することによって、神様に対して逆らう！という反逆行為に出たわけなのです。

これが、如何に、大きな…、如何に、神様を冒瀆する行為であるか、皆さんも分かってくださいませよな？でも、それこそが、ヘロデの選択であり…、彼の生き方であったのです。今日の冒頭の言葉で言うところの「人間性」であります。…そうでしょ？…そうして、次に、そのヘロデが犯してしまった過ちについて見ていきたいと思います。どうぞ、今日のみことばの後半部分をご覧ください。

II・“悔い改め”をしなかった！（19-29 節）

ここマルコ 6:19-29 で説明されているのは、バプテスマのヨハネが殺されるに至った“生々しいいきさつ”であります。ここのみことばが、特に訴えてくれているのは、この時のヘロデ王には、幾つかのチャンスがあったにも関わらず、とうとう、最後まで、“悔い改め”ををしなかった！ということですよ。そういったことを今から、皆さんと確認していきましょう。マルコ 6:19-29 には、こう記されています。

- 19 ところが、ヘロデヤはヨハネを恨み、彼を殺したいと思いながら、果たせないうでた。
- 20 それはヘロデが、ヨハネを正しい聖なる人と知って、彼を恐れ、保護を加えていたからである。また、ヘロデはヨハネの教えを聞くと、非常に当惑しながらも、喜んで耳を傾けていた。
- 21 ところが、良い機会が訪れた。ヘロデがその誕生日に、重臣や、千人隊長や、ガリラヤのおもだった人などを招いて、祝宴を設けたとき、
- 22 ヘロデヤの娘が入って来て、踊りを踊ったので、ヘロデも列席の人々も喜んだ。そこで王は、この少女に、「何でもほしい物を言いなさい。与えよう」と言った。
- 23 また、「おまえの望む物なら、私の国の半分でも、与えよう」と言って、誓った。
- 24 そこで少女は出て行って、「何を願いますか」とその母親に言った。すると母親は、「バプテスマのヨハネの首」と言った。
- 25 そこで少女はすぐに、大急ぎで王の前に行き、こう言って頼んだ。「今すぐに、バプテスマのヨハネの首を盆に載せていただきとうございます。」
- 26 王は非常に心を痛めたが、自分の誓いもあり、列席の人々の手前もあって、少女の願いを退けることを好まなかった。
- 27 そこで王は、すぐに護衛兵をやって、ヨハネの首を持って来るように命令した。護衛兵は行って、牢の中でヨハネの首をはね、
- 28 その首を盆に載せて持って来て、少女に渡した。少女は、それを母親に渡した。
- 29 ヨハネの弟子たちは、このことを聞いたので、やって来て、遺体を引き取り、墓に納めたのであった。

●自分の過ちに気づきながら、それを改めなかった。

人が間違っただ道を突き進んでいても、実は、それが間違っただ道である、ということに気づいていない場合があります。…例えば、最近、ニュースでも時々報道されているような…、道路を逆行していたなんて…。ありますでしょ？…ああいった場合の多くは、実は、その運転手は、「自分が道路を逆行している」ということに気づいていない場合が多いと言われてます。

ですから、今日のみことばの場合でも、もしも、万が一、ヘロデが、「自分の結婚が、神様のみことばに反している」ということに気づいていなかったのなら、話は別です。でも、残念ながら、ここのみことばは、それは教えてはけません。ヘロデは、自分の選択が…、また、その結婚が、主の前に正しくない！ということ十分に理解していたのです。どうぞ、今日のみことばの 20 節に、もう1度、注目してください。そこには、こうありますでしょ？『それはヘロデが、ヨハネを“正しい聖なる人”と知って、彼を恐れ、保護を加えていたからである。また、ヘロデはヨハネの教えを聞くと、非常に当惑しながらも、喜んで耳を傾けていた。』…このみことばがはっきりと教えてくれているように、この時、ヘロデは、このヨハネという人物が、①正しい、②聖なる人であるということ、よく分かっていたのです。

ここで、『正しい』と訳されているギリシア語の言葉(δίκαιος)は、「正しい、正義の、公正な…」という意味の言葉ですが、「特に、神様の目から見た時の正しさや義」を表現する場合に使われています。また、この言葉は、ローマ 3:10 の『…義人はいない。ひとりもない。』という、『義人』という表現にも使われています。…もちろん、神様の前に、完全な正しい人間というのは、イエス・キリスト以外にはおりませ

ん。しかし、このバプテスマのヨハネは、ある程度、神様の義を反映するような、そんな人物であったのです。それと、もう1つ、ここ 20 節の『聖なる人』という表現も、よく似ています。ここで、『聖なる』という表現に使われているギリシヤ語 (ἅγιος) は、「神様だけが御持ちの聖とか、神様の御用に使われるだけの特別なものを指す場合に使われるような聖さ」を表わす場合に使われる言葉です。…つまり、ヘロデ王は、このヨハネが、正しい…、良い人間で、しかも正しい動機から、ちゃんと正しいことを言ってくれているということを知っていたのです！

だから、このヘロデは、ヨハネのことを「煙たい」と思いながらも…、そのヨハネのことを恐れ…、保護を加えていたというわけです。また、20 節の後半でも教えられてるように、『喜んで耳を傾けていた』わけです。ここ 20 節、ヘロデがヨハネの教えを聞く時に『喜んで耳を傾けていた…』と書かれてある直前に、『非常に当惑しながら…』とあります。ここで、「当惑する」と訳されてあるギリシヤ語 (ἀπορώ) は、「当惑する(の他には)、手段が無い、困る、途方に暮れる、悩む…」という風な状態を表わされる時に使われる動詞です。つまり、この時、ヘロデは、ヨハネを通して聞く、神様の教えを喜びつつ…、それと同時に、自分の中にある罪と言うか、一種の欲望などで深く悩んでいたわけなのです。

皆さん、覚えてくださっています？…例えば、あのイエス様は、山上の説教の最後で、何と教えられました？どうぞ、できましたら、マタイ 7:20-28 をお聞きくださいます？『20 こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。21 わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。22 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう、『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行ったではありませんか。』23 しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します、『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』24 だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。25 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです。26 また、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行わない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。27 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。』28 イエスがこれらのことばを語り終えられると、群衆はその教えに驚いた。』

⇒ここで、イエス様は、本当に救われている者と、救われているように“見えて”、本当は救われていない者たちとの区別について教えてくださいました。その中でイエス様は、本当に救われている者と、そうでない者たちとの違いについて、どう説明してくださいました？預言できるかどうかでした？悪霊を追い出したかどうかでした？あるいは、奇蹟を行なったかどうかでした？…いいえ、その違いは、イエス様の御教えを聞いて、それを行なっているかどうかでした…。しかも、イエス様は、その微妙な違いを明確にするために、敢えて、こんな風な説明をしてくださいました。それは、26 節のこういった表現です。『また、わたしのこれらのことばを聞いて“それを行わない者”はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。』って…。皆さん、分かってくださいます？ここで、イエス様は、本当に救われている者と、そうでない者たちとの違いを明確にするため、それは、みことばを聞いているかどうかではない！その聞いたみことばを行なうか行なわないかである！ということをお教えくださったのです！…違います？

今日のみことばの 20 節に記されてある、ヘロデ王がヨハネの教えを『喜んで耳を傾けていた…』というところの表現には、たった1度や2度の経験ではなくて、習慣的な行動について教えられてあります。…ということは、この時のヘロデは、ヨハネから習慣的にみことばを聞いていたのです。…にも関わらず、このヘロデは、自分の罪や過ちを悔い改めることをせず、ますます、罪の深みにはまっていってしまったのです。

●最後まで、その罪を 貫き通して しまった…。

どうぞ、今日のみことばの 21 節以降に注目してってください。そこには、ヘロデが誕生日を迎えた日のことが記されてあります。簡単に説明をいたしますと、そのパーティの時、ヘロデの妻となっていたヘロデヤの娘が素晴らしい踊りを披露します。恐らく、ここで言われている娘というのは、ヘロデヤとその前の夫との娘の「サロメ」ではないかと言われています。その娘に対して、ヘロデ王は、「何でも、お前の欲しいものを与えよう！例え、私の国の半分でも与えてやるぞ！」というような、実に、いい加減な約束をしています。すると、その娘は出て行って、母であるヘロデヤに相談します。すると、その母は、「バプテスマのヨハネの首を願いなさい！」と娘に対して命じるわけです。

そこで、その娘は、大急ぎで、ヘロデ王の前へ行って、母親の命令通り、「今すぐに、バプテスマのヨハネの首を盆に載せてほしいです！」と願います。恐らく、ヘロデの妻であったヘロデヤからすると、そのヨハネのことがうとましかったのでしょうか…。しかし、ヘロデは、ヨハネの首をはねることに躊躇します。しかし、この時代、この中東エリアで、1度誓ったことを簡単に取り下げることはできませんでした。また、ヘロデは、そこに、身分が高い者たちが大勢居たこともあって、その少女の願いを退けることができませんでした。そして、とうとう、ヘロデはヨハネの首をはねてしまったのです。

恐らく、このみことばを見る限りでは、このヘロデ王よりも、その妻であったヘロデヤの方が罪が重くて、より悪意が強かったように思われます。しかし、そんなことは関係ありません…。要は、このヘロデが、自分自身の罪を認めることなく…、また、このヨハネが神様から遣わされた特別な人物であるということを知っていたながら、ヘロデが、そのヨハネを殺してしまったという事実です。そこには、何の言い訳もできません。私も、この時代背景に特別詳しいわけではありませんが、恐らく、このヘロデは、ヨハネのことを助けることもできたのではないのでしょうか？…だって、このヨハネは、何か法を犯したわけでは無かったですよ？

しかし、とうとう、ヘロデ王は、最後の最後まで、自分の罪を認めることをせず、何と、救い主イエス様の先駆者であったヨハネを殺してしまったのです！実は、この後、今日のみことばに出てくるヘロデが、どうなっていたか、詳しくは教えてはくれませんが、しかし、今日のみことばの 16 節が、その前兆？について教えてくれています。『しかし、ヘロデはうわさを聞いて、「私が首をはねたあのヨハネが生き返ったのだ」と言っていた。』って…。この時、ヘロデは、イエス様に関する噂を聞いて、「自分が首をはねた、あのヨハネが生き返ったのだ！」と言って、恐怖におののくわけです。このように、神様に逆らった選択に、平安はありません！…特に、このヘロデは、神様のみこころを、恐らくは、妻のヘロデヤよりも…、ひょっとしたら、一般の民衆たちよりも、よく知っていたのです！…でも、知っているだけでは意味がありません。

ヘブル 10 章には、このような厳しいみことばが記されてあります。『26 もし私たちが、真理の知識を受けて後、ことさらに罪を犯し続けるならば、罪のためのいけにえは、もはや残されていません。27 ただ、さばきと、逆らう人々を焼き尽くす激しい火とを、恐れながら待つよりほかはないのです。』(ヘブル 10:26-27) って…。このヘロデは、ヘロデヤのような悪女？と比べると、幾分かはマシで…、ヨハネから、直接教えを聞いていた分、その犯した罪や裁きは軽いと思われるかも知れません。でも、聖書のみことばは、そうは教えません！もしも、私たちが、しっかりと、神様のみこころを理解できていながら、罪を悔い改めることをせず、さらに、罪に罪を重ね続けるなら、その罪は…、あるいは、その裁きは如何に重いものとなるでしょう？…だから、ヤコブ 3:1 のみことばも、こう教えるわけです、『…ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。』って…。みことばをよく理解し、神様のみこころをより深く理解している者たちが犯す罪は、決して、軽いものではありません。

実は、この後、このヘロデ王は、イエス様の裁判の時、ようやく、イエス様と会うことができます。彼が直接、イエス様を十字架に追いやったわけではありませんが…、しかし、このヘロデは、イエス様の死とも関わっています。そうして、歴史を見ると、ある程度、晩年のヘロデのことについて知ることができます。

このヘロデですが、この後、ヘロデヤでは“ない”前妻の父アレタ4世が、自分の領地に攻め入ってきたことで、敗北を喫します…。また、その後、ローマ皇帝になったカリグラという皇帝からは、当時残っていた領地もすべて取り上げられてしまって、妻のヘロデヤと一緒に、追放の刑に処せられてしまったそうです。

<励ましの言葉>

恐らく…、「このヘロデが救われることが無かった…」というのが、多くの聖書研究者たちの見解です。彼もまた、あの先駆者であったバプテスマのヨハネから、直接教えを受けて…、必要ならば、いつでも、救いに関するメッセージを聞くこともできました…。いえ、彼は、救い主であるイエス様とも、直接言葉を交わしたことも有ったのです。そんな救いの御計画の直ぐ近くに居ながら…、恐らく、救われることもありませんでした。しかし、皆さん、どう思われます？ヘロデ王が救われ得なかったのは、神様のせい…、“神様の側の問題”であつたのでしょうか？

⇒いいえ…、そうではありません。ヘロデには、たくさんのチャンスがありました。必要ならば、彼はいつでも、バプテスマのヨハネや、イエス様からも、福音に関する教えや救いのメッセージについて聞くことができ…、彼は、いつでも、必要なアドバイスを受けることができ…、その罪や過ちを悔い改めることだって、できたのです！しかし、ヘロデが自分自身の選択で、悔い改めることをせず…、神様に従わないで、奥さんの言いなりになり…、ヘロデヤとの結婚生活に固執してしまったのです。

確かに、最後、ヘロデが追放されてしまった時、ヘロデヤも一緒についてきてくれたようです。しかし、彼らに、果たして、本当の喜びや平安、感謝などが有ったのでしょうか？果たして、彼らの行った終着点は、どこだったでしょう？確かに、私たちはある程度、自分の行く先を決めることはできます。しかし、私たちが、最後に行き着く…、一番大切な行き先は神様にしか決めることができません。もしも、私や皆さんが、神様からの祝福を損なってしまったら、果たして、その先には一体何があるのでしょうか？どうか、この世での楽しみや贅沢ではなく…、真の神様だけが与えてくださる本当の祝福を願い求める者であっていただきたいと思います。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。